

母校便り

山口大学農学部同窓会東京支部

共同獣医学部同窓会創設

平成30年3月20日山口大学の卒業式が挙行されました。同日午後より共同獣医学部（他学部も同様に）卒業式、並びに謝恩会が開催され、26名の第1回共同獣医学部学生が卒業。獣医師国家試験全員の合格の朗報と重なり、2重の喜びとなりました。

卒業式の前日、3月19日、共同獣医学部としての同窓会が創設され、それまで同窓会創設準備を進めてきた委員のなかから深町輝康（V16, S43）氏が選出されました。農学部同窓会東京支部はしばらくの間、そのままとし、獣医系同窓生は今後、適時共同獣医学部同窓会へ移行することとなりました。詳細は次号にてお知らせいたします（農学部同窓会東京支部事務局）。

共同獣医学部第1回生卒業



新企画！

最先端を走る同窓生に今を語って頂きます

Pioneer

塩松 洋造氏

山口大学農学部 生物資源科学科 応用生物化学講座 1997年卒業
同大学院農学研究科 応用生物化学講座 1999年修了

～ 山大農学部で培ったセンスでグミキャンディを輝かせたい ～

幼少のころから理科が好きだった私にとって、身近な理科といえば「食品」が思い当たり、食品会社で働きたいという進路イメージがありました。農学部で過ごした6年間で、進路イメージは現実味を帯びていき、食品加工技術に携わりたいと思うようになりました。

私が卒業した1999年は就職氷河期でした。企業からの「今年は募集しておりません」という門前払いに、同世代の方々は苦しまれたと思います。そのような逆境のなか、私は「会社に無いものを補う異色な人材になりたい」と考えるようになりました。

大学時代は食品化学研究室に属し、蛋白質の物性（ゲル強度、油との親和性、劣化耐性）について研究しました。就職を考える際、当初は大学時代の研究に近いものを会社でも続けたいと考えましたが、取って、糖質を扱うキャンディ会社を受けました。今思えば、その選択は正しかったのかもしれない。

会社に入ってみると、主力キャンディ（ミルク飴、カンロ飴、黒飴、グミ）はほとんど糖質の塊ですが、実はその中に数%だけ配合される蛋白質が味わいや食感のポイントとなっていたのです。蛋白質は糖質と加熱下で反応して香ばしい醤油のような風味になります。また、蛋白質は糖質と脂質のつなぎ役となるので脂質の多いミルク飴などでは蛋白質の使い方が重要です。グミにおいてはゼラチンという蛋白質が食感（硬さや歯切れなど）に大きく作用します。農学部で培った蛋白質の知識は糖質中心の会社で即戦力として生かされました。また、蛋白質の応用実績を皮切りに、他の原料（多糖類、脂質、ミネラルなど）においても、本質的に食品中でどのように作用しているかを洞察し、色々な原料を本来の使い方ではなく、自由な使い方をして開発に役立てました。機能性素材を味付け素材として使用したり、ヌルヌルするキャンディ、口臭を消すキャンディ、血糖値を上げないキャンディ、発酵を利用した深い味わいのキャンディなど、これまでに10件の製法特許出願をしました。

以上の成果は農学部での経験に基づくものでした。恩師の松富先生は、食品を「科学の目で見つめてほしい」とおっしゃっていました。今の私は「科学の目」でキャンディを見つめているのだらうと、当時のお言葉を思い出します。また、農学部では、ゼミのテーマを自由に選定し、文献調査を重ね、自力でプレゼンを作り上げていました。卒業研究においても、基本的には自力で考えて推進していました。自由な校風であったがゆえに自主性が必要でした。納得のいくプレゼンや実験が成功すると大きな達成感がありました。研究における自由な発想と自主性は農学部で学んだものでした。また、友人にも恵まれました。私の友人達はパワフルに遊びつつ勉強もしておりました。私のゼミがおもしろいと称えてくれましたが、手を抜くと本気で激怒してきました。20年前のライバルが今でも意識の中に存在しております。自然に囲まれ、ゆっくりした時間の中で、科学の目を育んでいただき、またライバルたちとの切磋琢磨の場として、山口大農学部は良い舞台でした。

私は現在、グミの開発リーダーをしております。GUMMYとは「ゴムのような」お菓子のことです。100年前にドイツの歯医者が子供の顎を鍛えるために開発しました。欧州では技術が進んでおり、色々な製法の機械が古くからありますが、日本では発展途上の分野です。私は、山口大農学部で培った「科学の目」でグミが輝く瞬間を追求め、日本での市場を拡大させ、世界にも通用するグミを開発していきます。（カンロ株式会社 豊洲研究所グミ開発チームリーダー）



メール配信にご協力を
皆様のメールアドレスを事務局まで
BCC配信ですのでアドレスは公開されません



会 長 深町 輝康 (V16, S43卒) : smile-vet@chic.ocn.ne.jp
事務局 桑野 昭 (V21, S48卒) : kuwa5ayt@green.ocn.ne.jp
幹 事 久保田 徹 (C2, S47卒) : tkubota39@m7.gyao.ne.jp

安齊 了 先生



母校で学び、各界で活躍された同窓の方々から
波乱に満ちた、真摯な軌跡を語って頂きます。

獣医学科27回生 (公財) 競走馬理化学研究所 理事長
元日本中央競馬会(JRA)監事

ごく普通のサラリーマン家庭に育った私は、幼い頃から動物のテレビ番組を見たり本を読むのが好きでした。高校時代も生物の授業だけは面白かったことから、将来は動物に係わる仕事に就きたいと思うようになり、やがて獣医師を目指そうと決めました。

山口大学に入学して最初は部活動(洞穴研究会)を楽しんでいましたが、2年生になると牧田先生の厳しい解剖実習が始まって遊んでばかりもいられなくなり、卒業研究は小原先生の家畜生理学教室で大学院生だった小田さんの指導を受けました。

私が入学した当時の獣医学科は4年制でしたが、在学中に数年後の6年制への移行(ただし、4年で一旦卒業し、修士課程を経て国家試験を受験する)が決まり、同級生の間には進学の空気が漂い始めます。私も高校時代の夢でもあった動物園への就職を一旦は目指したのですが、最終的には修士課程へ進みました。

大学院修了後は、日本中央競馬会(JRA)に就職し、そのまま36年間務めることになるのですが、当時の私は競馬をやったこともなければ、馬も特に縁はなく、競馬好きの同級生から聞いた日本中央競馬会の話がきっかけで就職試験を受けたのがその始まりでした。いざ入会すると周りは競馬や馬に詳しい人だらけで、当然ですが少し辛い新人時代でした。

最初は、茨城県にある美浦トレーニング・センターというところに配属され、平日(水～金)は診療所で競走馬の臨床(平常業務)、週末(土・日)には全国の競馬場へ出張して別の業務(開催業務)に携わりました。平常業務と開催業務を併任するのはJRA職員の特徴ですが、日々忙しく過ごす中で、次第に競馬の仕事にも慣れてきました。

5年後、栃木県にある競走馬総合研究所へ異動となり、今度は細菌感染症の研究に従事することとなりました。細菌学にもそれまでは縁がなく“30の手習い”でしたが、その頃には“腰を据えた仕事をしてみたい”と思い始めていたこともあり、また尊敬できる上司に恵まれたこともあって、それからの20年間はとても充実して過ごすことができました。臨床現場から送られてくる検体の病性鑑定を行いながら、検査法や疫学の研究を行い、さらには菌の病原性を探る基礎的研究にも取り組みました。研究成果は積極的に学会発表しながら論文にまとめ、応用できそうなものは自らその実用化を図ることで、研究と臨床さらには防疫が一体であることを実感しました。その頃、サラブレッドの生産地には馬伝染性子宮炎がまん延していましたが、当時は未だ珍しかったPCRによる診断法を動物衛生研究所と共同で開発し、更にはそれを武器に現場や行政の場に出て行き、清浄化プロジェクトを立ち上げ、様々な人たちを巻き込みながらこれを進め、最後に清浄化を達成したことは、印象に残る仕事のひとつでした。

50歳になった年、研究所からJRA本部の防疫課長へ異動となったのですが、その時は馬インフルエンザの流行に遭遇しました。海外から持ち込まれたウイルスにより36年ぶりの国内流行が起こり、馬の移動制限がかかって競馬開催が中止される事態となりました。その後1年を費やして清浄国へと復帰するのですが、それまでの研究職として培った感染症の知識や経験が、違った立場で防疫対応の前面に立たされたその時にも、大いに役立ちました。

その後は再び研究所に戻って、研究管理あるいはJRA全体に係わる仕事を行い、昨年の10月にJRAを離れて、現在は競走馬の薬物検査とサラブレッドの親子鑑定を行う公益財団にお世話になっています。

ひょんなことから競馬の社会に足を踏み入れ、学生時代に思い描いていた将来とはずいぶん違う道をここまで歩いて来ました。でも、振り返ると、世の中はその頃に思っていたよりもずっと多様でそれぞれ奥が深く、しかしその底ではどこか繋がっているものだなと感じています。若い時代には、自分が知っている社会の型に自分を嵌めて嵌める必要はないのかもしれませんが。皆さんも一度、馬と競馬の世界を覗いてみませんか?なかなか興味深いですよ。

山大OB、OG会(東京) 便り

谷本 昌太 先生(県立広島大学 教授)を囲む会

県立広島大学 人間文化学部 健康科学科 教授の谷本昌太先輩が、日本水産学会春季大会に参加されるため、3月下旬に上京されました。年度末のお忙しい中、食品化学研究室卒の関東在住の有志6名(友延さん、和田さん、村木さん、三古さん、佐々木さん、中嶋)が東京・八重洲口の居酒屋に集合し、思い出話と同級生の動向等を肴に盛り上がりました。最近、新しいことを思い出すのに苦労しておりますが、まだ学生時代のことはよ～く覚えておりました。

4月中旬には、佐々木さん、村木さん、斉藤さんが県立広島大学を訪問し、製薬会社の研究開発(仕事)をテーマに学生さんに講演されました。なぜか湯田温泉に前泊し、農学部にも立ち寄り、後輩達にも医薬品メーカーに纏わる高尚な講演をされたようです。また、大恩師小林先生宅訪問、並びに恩師の先生方(加藤先生、松富先生、阿座上先生)とは湯田温泉で懇親会も企画し、大変有意義な旅ですね。飲み会の戯言かと思っておりましたが、ちゃんと実現するところが、バブル世代の鑑ですね。同門の氷河期世代代表の塩松さんとのギャップが…(笑)(中嶋 久士 C23, H5)

訃報

村上洋介先生(V21, S48): 長年日本の家畜衛生の研究や防疫行政を牽引された元動衛研所長(ニューズレター、私の軌跡No.1)、村上洋介先生が平成30年5月6日永眠されました。(合掌)

編集後記

山口大学を卒業し、それぞれの分野で、最先端をまっしぐらのことと拝察申し上げます。皆様の活動の原点は母校です。後輩には先輩の活躍が輝いて見えます。

平成30年度東京支部
同窓会開催のお知らせ

平成30年11月24日(土) 14:00~17:30
場所: 赤坂エクセルホテル東急13階
総会・小講演会: 雅の間、
懇親会: 光の間
東京都千代田区永田町2-14-3
TEL: 03-3580-2311
会費: 10,000円

発行人/山口大学農学部同窓会東京支部